

距離に所在する。会津地方では、全体構造と遺構変遷が判明している数少ない方形館跡の1つであり（(財)福島県文化振興事業団2002）、下高額館跡とは、一定の併存期間がみられる（麻生館I～II期：下高額館II～III期）。ここでは、その間を対象に相違点を要約する（図88）。

- A) 平面形に違いがみられ（縦長長方形－横長台形）、面積は近似している（5,300m²－5,000m²）。堀の幅・深さは、下高額館跡の方がしっかりととしていて土塁を伴い、防御的性格が強い。
- B) 麻生館遺跡は、主殿がほぼ中央にあり北半部が空閑地なのに対し、下高額館跡は、主殿を含み堀・土塁の手前まで建物配置が行われる。また麻生館遺跡は、主殿の西・南側に直列の建物配置が行われていない。
- C) 麻生館遺跡は、主殿に南面して池が設けられず、広い空閑地になっている。しかし、報告書ではここに庭園が営まれていたと推定されており、東側未調査区に池の存在した可能性も考えられる。その場合、両者は類似した構造となる。
- D) 麻生館II期・下高額館II期の主殿は、平面形・構造が比較的近似する。また、堀外部に建物配置が行われる点も一致している。

以上から両館跡は、全体規模、主殿の平面形・構造、堀の外部に建物配置が行われる点が類似する一方で、内部の建物配置にはかなり違いが認められた。また麻生館遺跡は、遺物の量が極端に少ない。それらが何に起因するものなのか、今後の課題である。

第7節 文献史料と発掘調査成果の整合性

下高額館跡には、造営年代・城主名の記録された文献史料が残っているが、その信憑性を、疑問視する向きもあった。次に、発掘調査成果との整合性をみていきたい。

文献史料にあらわれた下高額館跡

下高額館跡には、以下の関連記録が認められる。

- A：『新編会津風土記』 至徳年間（1384～1387）、耶麻郡十二箇村を領有する蘆名氏家臣の渡邊左京進長勝が、同郡下高額村に館を構える。また、至徳元（1384）年には、村内に自らの名を寺号として長勝寺を建立した。
- B：『貞山公治家記録』 天正17（1589）年、葦名氏旧臣の十二村助左右衛門が、伊達政宗から会津北方十二村を安堵された。

補足すると、Aの長勝寺は下高額村に現存し、境内には板碑が残っている。板碑は、年号部分が欠損しているが、至近距離に14世紀後半（IV期：1361～1396）の板碑群がみられ（図89-6～19）、それもほぼ同じ頃のものとみられる（柳内壽彦2000）。この年代観は、史料に記録された長勝寺の建立年代（1384）と合致する。

また、Bの「十二村」は、Aの「十二箇村」と同一で、十二村助左右衛門も、下高額村に館を構

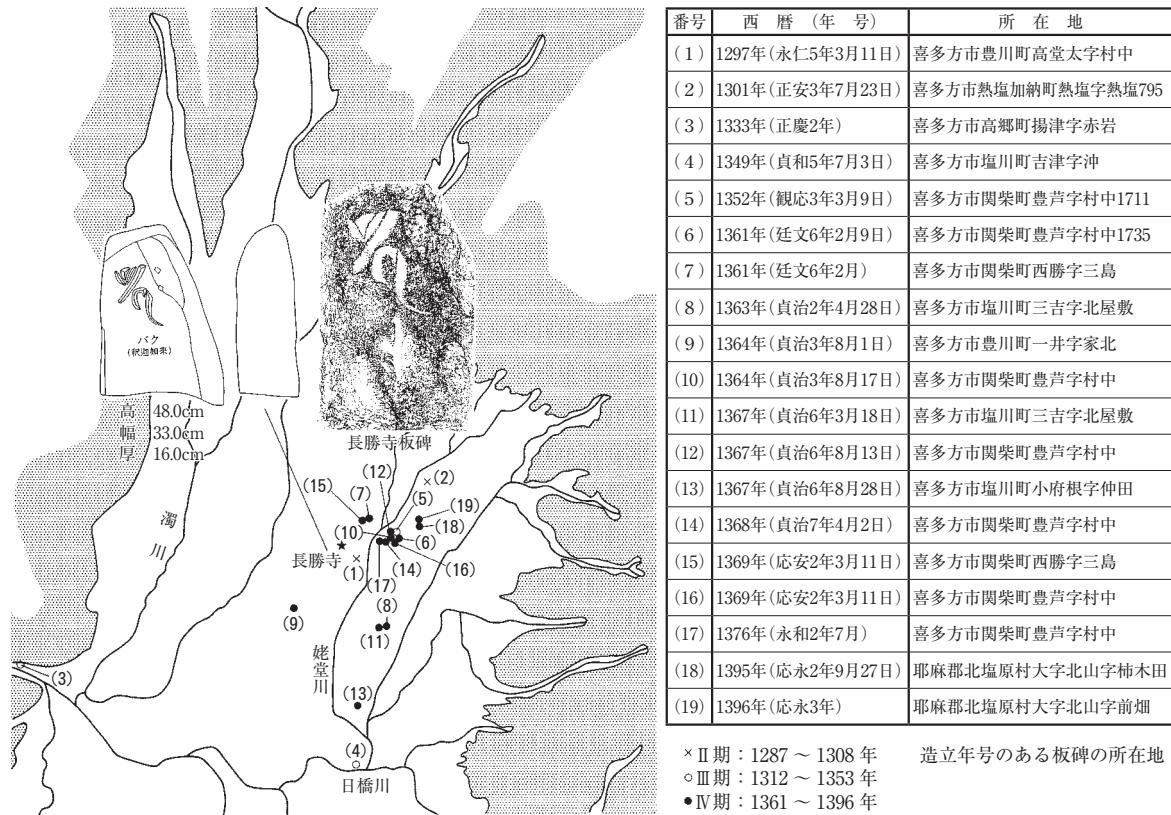


図89 周辺の板碑

えたと推定される（喜多方市史編纂委員会1995）。渡邊氏と十二村氏の関係は不詳であるが、同一系譜である可能性が指摘されており（喜多方市史編纂委員会1995）、十二村家は、現在も館跡の南東隣接地に断絶することなく続いている。

今回、判明した館の存続年代（14世紀後半～17世紀初頭）は、その2名に関する文献記録と一致した。したがって、記述内容の信憑性と共に、両氏の連続性がほぼ裏付けられたと考えられる。

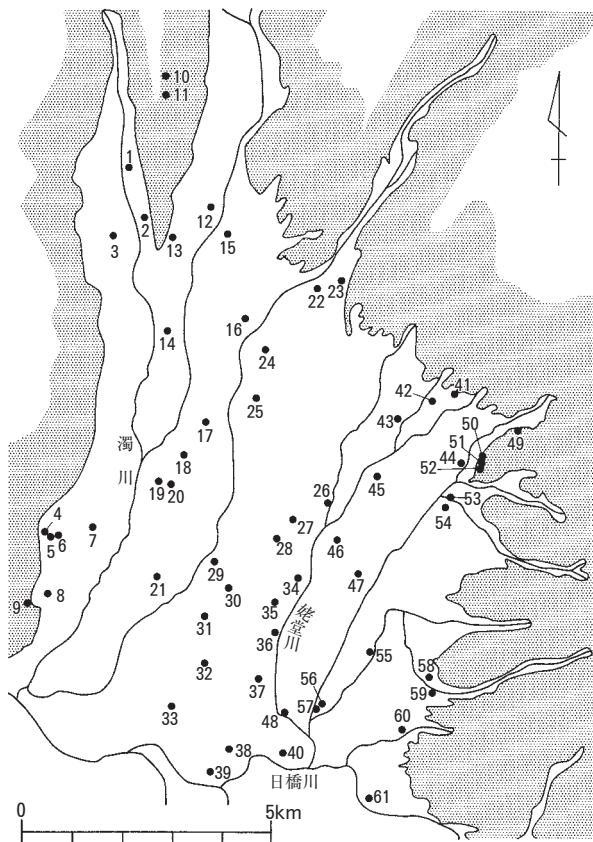
なお、文化12（1815）年の村絵図には、館跡が水田へ帰し、十二村家は現在地に移動していた様子が描かれている。それでも、館の跡地には「北屋敷」の小字名が確認され、この時点ではまだかつての存在が認識されていたようである。しかし、明治15（1879）年の丈量図ではその地名も消え、地域住民から館の存在は忘れ去られていた。

歴史的背景

最後に、歴史的背景を探ってみたい。

図90・91は、『福島県の中世城館跡』（福島県教育委員会1988）を基礎データに、平地城館跡の分布と変遷を整理したものである。これをみると、下高額館跡の所在する会津盆地北部には、60箇所を超える平地城館跡を確認することができ（図90），それらの造営場所は、盆地西部から東部へ順次移動して、最終的には全体に拡散した動きが読み取れる（図91）。

そのうち、下高額館跡が成立した14世紀後半に焦点を当てると、姥堂川流域の狭い範囲に造営場



遺跡名	文献	城主・年代など
1 (添田館)		
2 鶩田館		
3 (譲屋館)		
4 慶徳城	A・B・C・E	天正年中(1573-1591)、蘆名の臣、慶徳善五郎が住む
5 新館	F	天正年中(1573-1591)、武藤和泉守が築く
6 荒神館		
7 谷地ノ城	F	承安元年、河内守吉実が住んだという
8 新宮城	A・B・C・K	建暦2年(1212)、新宮時連が築いたという
9 駿河館	B・K	永享の頃(1429-1440)、西海枝駿河守が築く
10 (針生館)	A・C	建長6年(1254)、山川七良重隆が築く、その子孫針生氏が住む
11 (畠中館)		
12 (吉志田館)	A・B・C	蘆名の臣、瓜生筑後重次が住む
13 青山城(東城)	A・B・C	加納庄領主、佐原氏(加納殿)が住んだという
14 新助屋敷	A・B	弘長の頃(1261-1263)、真壁備中元勝が築く、天正期、穴沢新助が住む
15 (高畠館)	A・B	伊沢権頭俊行のち神保小次郎長保が住んだという
16 (下岩崎館)	A・B・C	天福の頃(1233)、飯島筑後信之が築いたといふ
17 坂井館	A・B・C	元龜・天正の頃(1570-1591)、小荒井阿波が住む
18 (塙原館)	B	天正期(1573-1591)、蘆名四天の宿老富田美作の嫡子富田将監が住む
19 (太郎丸西館)	A・B・C	永祿11年(1568)に、太郎丸河内守盛次が築いたといふ
20 (太郎丸東館)	B	天正(1573-1591)の時代、太郎丸掃部が住む
21 (長尾館)	A・B・C	新宮五郎左衛門宗連が築いたといふ
22 (上岩崎館)	A・B・C	大永の頃(1521-1528)、遠藤助兵衛(大隅)が築く
23 (大沢館)	B	蓮沼信濃某が住んだといふ

文献: A会津古里記 B新編会津風土記 C会津鑑 D会津旧事雜考
 E耶麻郡誌 F慶徳村旧記
 G伊達治家記録 H伊達天正日記
 I蘆名家分限録 J蘆名家御旧臣見分録
 K新宮雜葉記 L異本塔寺八幡宮長帳
 M檜原軍物語

遺跡名	文献	城主・年代など
24 (稻村館)	B	天正の頃(1573-1591)まで、蘆名小太郎盛保が住むといふ
25 (小田付館)	A・B・C	佐瀬木和種常、五十嵐善次郎冒勝が住む
26 (中明館)	A・B	菅沼伊賀某が住んだといふ
27 (下勝館)	B	大原伊賀守某が住んだといふ
28 (下高額館)	A・B・C	至徳の頃(1384-1386)、渡辺左京進長勝が住むといふ
29 (菅井館)	A・B・C	康安2年(1362)、三橋太郎義通が築いたといふ
30 (渋井館)	A・B・C	天文9年(1540)、池田備中政宗の二男、勘次郎俊甫が築く
31 柴城	A・B・C・I	応安4年(1371)、柴城民部重行が築く
32 沖館	B・C・J・N	山口沙那道光が住む
33 貝沼館	B・J	三橋太郎義道が康安2年(1362)に築く
34 (太田館)	B	天正年中(1573-1591)、蓮沼備中某が住んだといふ
35 鏡ヶ城	A・B・H	至徳元年(1384)に平田大隅が築いたといふ
36 新井田館	A・B・J	建仁3年(1203)に新井田太良重国が築き、のち田辺左衛門義秀が住んだ
37 上江館	B	栗村彈正清政が天正年間(1573-1591)住む
38 下遠田館	A・B・C	三橋備前重定、二男刑部重治が住む
39 新屋敷	B	
40 小十郎館	B	天正17~18年に片倉小十郎(1589-1590)が築城果たせず、長井に移る
41 赤館	B	綱取城主、松本勘解由の臣中ノ目阿賀が住んだといふ
42 新井館	B	松本勘解由の臣、新井善五郎が住んだといふ
43 一盃館	B	松本勘解由の臣、一盃大輔が住んだといふ
44 山口屋敷	A・B・C	天文年中(1532-1554)、山口弥太良実村が築く、羽曾部を氏とした
45 (中里館)	B	佐藤河内某が住んだといふ
46 (布流館)	B	手代木某が住んだといふ
47 南館	B・D・L	中ノ目城、中ノ目式部大夫盛光が天正年中(1573-1591)住む
48 (別符館)	A	佐野平内工門が住む、別符は莊園関連地名
49 (佐原館)		
50 (館)		
51 (館)		
52 (館)		
53 (高柳北館)	A・B	野部清吾某が住んだといふ
54 (高柳南館)	A・B	坂井雅楽が住んだといふ
55 常世館	B・L	常世大炊助が永禄年間(1558-1569)住む
56 丹波館	A・B・C	上窪村樋、宇都美丹波が住む
57 (上窪南館)	B	葛西右馬介の館か
58 南屋敷	A・B・C	間鍋備中が住む
59 小滝館	A・B・J	小滝右衛門慰義直が徳治年間(1306-1307)に築く
60 深沢館	B	
61 金川館	B・C・J	石井修理維人が永仁年間又は永保年間に築くといふ

図90 平地城館跡の分布 (1)

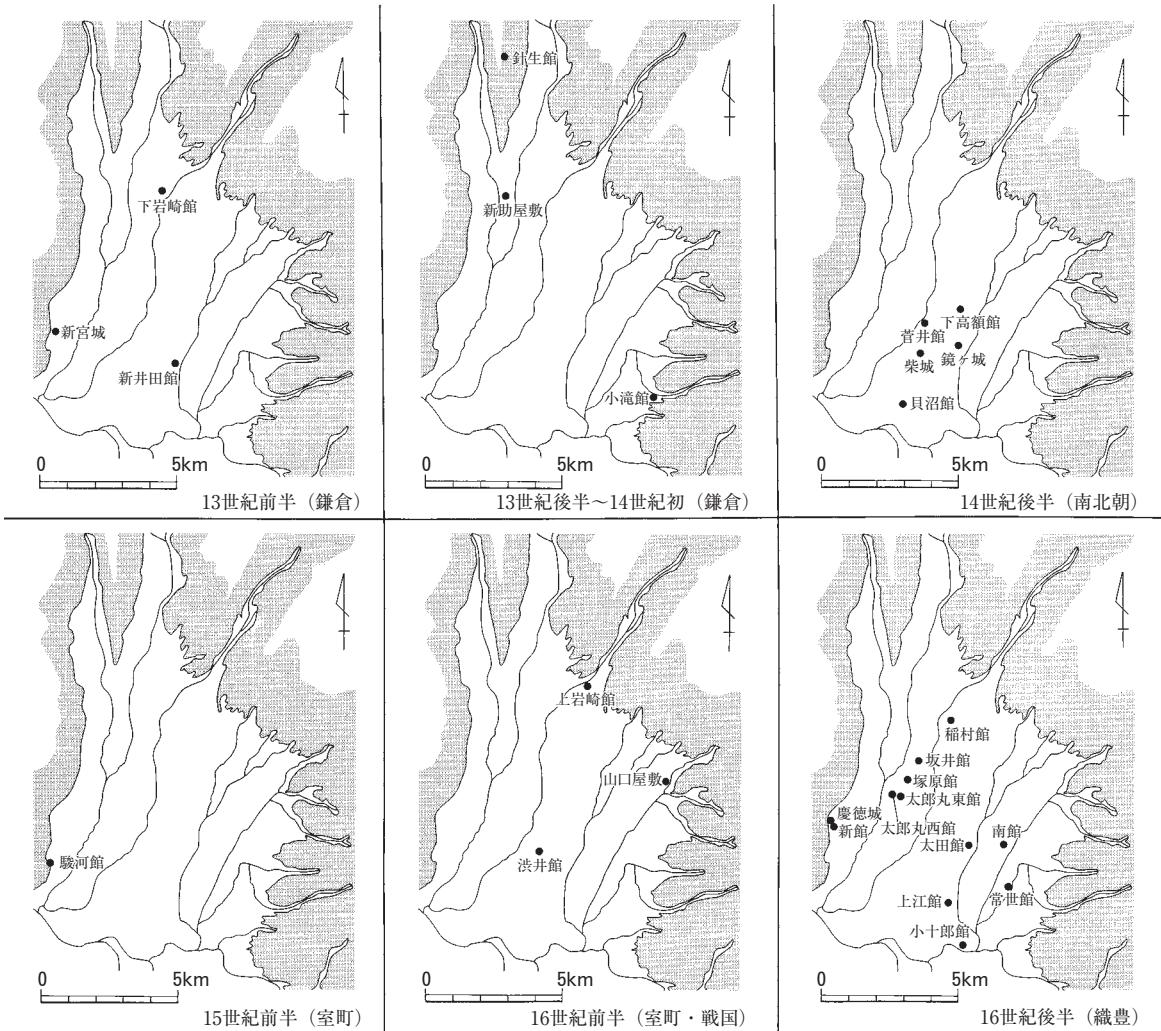


図91 平地城館跡の分布 (2)

所が限定され、鏡ヶ城跡の半径3km以内に、下高額館跡・菅井館跡・柴城跡・貝沼館跡が集中することが指摘される（図90-28・29・31・33・35）。したがって、一帯に何か特別な事情が発生したことが推測され、このことは、ほぼ同位置で14世紀後半（1361～1396）の板碑が集中的に造立された現象と符号している（図89）。

この14世紀後半は、ちょうど葦名直盛が会津へ下向した頃である（佐藤健郎1986）。また、鏡ヶ城は葦名氏四大家老の筆頭、平田氏累代の居城とされ、他の4城館跡に比べて格段に大きな規模を備えている（塩川町教育委員会2001）。そうすると、下高額館跡は、会津地方における葦名支配が本格化する中で、鏡ヶ城の支城の1つとして成立した可能性が指摘できるのではないだろうか。もちろん、この仮説は文献に依拠したものであり、今後、批判的に検証されなければならない。

また、館II期の廃絶状況にも注目したい。これは、16世紀後半という戦国時代末期の年代を考慮すると、奥羽仕置に伴う破却（伊藤正義2001）の可能性も選択肢の1つにあげられる。

3次調査以降で、さらに検討材料が増えることを期待してまとめに代えたい。 (菅原)